
仮面ライダーディケイド～仮面ライダーオーズの世界～

剣崎シンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜仮面ライダーオーズの世界〜

【Nコード】

N6186X

【作者名】

剣崎シンジ

【あらすじ】

仮面ライダーディケイド…門矢士は様々な世界を旅していた。

そして今度の世界はオーズの世界！

だがその世界では探偵の士、派手なおじさん、そして人を襲うオーズ！？

仮面ライダーディケイド…その瞳は何を見る？

第一章（前書き）

はじめまして剣崎シンジです！
これが初作品なので暖かく見守ってもらえるとありがたいです。

第一章

新しい世界と金持ちと人探し

「ここが新しい世界か」

俺の名前は門矢士。訳あって様々な世界を旅しているのだが、今度
は高いビルが建っている街に来ていたのだ。

「今度はどんな世界なんでしょう？」

「ていうか士、その格好…」

先から順に光夏海、またの名をなつみかん。
それと小野寺ユウスケ。仮面ライダークウガがなんか言っていた。
分かってるよ…分かってんだよそんなこと…！

「探偵…だよな」

「お前もな」

「えっ!？」

気づいていなかったのかよ…。

ユウスケのアホさには脱帽するぜ。

「探偵ですか。この世界での士君の役目は何なんでしょうね」

「知るか。適当に行動してれば勝手に何か起こるだろ」

「探偵何て何するかわかんないよオレ!？」

とりあえずすることもなくブラブラ歩いていると、

「もしもしちょっといいかね」

「？」

誰だ？

後ろを振り向くとそこには赤い派手な服を着た初老の男が立っていた。

「何か用か？」

「君たちは探偵か何かかい？依頼をしたいのだが」

「…」

いきなりだな…。

とりあえず話を聞いて判断するか。

「わかった。話を聞こう」

「人を探してほしい」

「人探し？」

ユウスケが聞き返す。

「あー…人ではあるのだから…説明しづらいな。写真を見せてくれ」

そういつて男は写真を取り出す。
そこには…

「「えっ!?!」」

「こいつは…」

「私は仮面ライダーオーズと呼んでいるよ」

そこには赤い鳥を連想させるマスクをした仮面ライダーが写っていた。

これで大体分かった…

「そうか…ここはオーズの世界か」

「喫茶店AGITΩ」

「オーズを探してほしい理由を聞かせてもらっていいか」

俺たちは場所を変えて喫茶店で話をしていた。
立ち話なんかゴメンだぜ。おぼちゃんじゃあるまいし。

「それは話せない。だがその分報酬ははずむ」

「口止め料か…いくらだ」

「2000万」

「「「2000万!?!?!」」」

「それとセルメダル2000枚も…って聞いてないね君達」

驚愕。

レベルが違いすぎる。

ここは断るのが懸命だろう。

「断…」

「やります!!」

「バツ…おい!!」

なつみかあああん!!! 何やってんだお前ッ!!

(これで士君に踏み倒されかけている分を取り返して…それどころかリフォームできます!!)」

「夏海ちゃん…? 途中から声がもれてるよ…」

おい原作のヒロイン! それでいいのか!

「でもまあ士。受けるのにはオレも賛成だな」

ユウスケまで…!。

このままでは押しきられる…!

「いやだめだ!! 2000万なんて怪しすぎるだろ!! よく考えろ!!」

「人の言うことを疑うのはダメですよ!」

「そうだそうだ!」

この能天気共め…!

「もういい! 勝手にしろ!!」

「それでは契約成立だね。私の名は斑鳩鴻星だ」

そういつて斑鳩は去っていった。

この時のことがあんなことに繋がるとは俺たちは思ってもみなかったんだ…。

第一章（後書き）

文才が無さすぎる！

そう思った方も思っていない方もこんにちは。

剣崎シンジです。

初作品を読んでもらってありがとうございます。

この小説は一応士目線から進んでいきますので悪しからず。

オリキャラについてですが、

いかるがこうせい
斑鳩 鴻星

鴻上光生のリイマジです。

ひとつの話を聞かない派手なオヤジですが、人のことは考えています。

次回はオーズ登場予定です！

第二章（前書き）

士「二章キターッ!!」

ユウスケ「俺たちがあらすじを担当するみたいだ」

夏海「私：今回空気なんですけど…」

士「なに言ってるんだ。お前は空気なんかじゃない、みかんだ」

夏海「士君!」

ユウスケ「あらすじ：やろうぜ」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事!!!」」

士「1つ!新しい世界に到着!」

ユウスケ「2つ!俺たちの格好：やっぱ探偵?」

夏海「3つ!斑鳩さんという人に依頼を受けました!オーズを探しましょう!」

第二章

バイクと000とタトバキック

俺たちは早速喫茶店を出てオーズを探して聞き込みをしていた……のだが…、

「オーズ？なんだそりゃ」

「この写真のヤミーのこと？」

「見たことはあるけどねー…すぐにどっか行っちゃって」

てのがほとんどなのだ。

ていうかヤミーってなんだ。

1時間も聞き込みをしてこれじゃあ埒があかない。
切り上げるか。

「おい、お前らそろそろ…」

「や、ヤミーだあああ！！！」

叫び声？どこからだ？

「ヤミー？」

「さっきもそんなことを言っているヤツがいたな」

「と、とにかく行ってみましょう！」

叫び声が聞こえた場所にはカマキリのような怪人、カマキリヤミーとバイクに乗った黒い服の兵士がいた：100人くらい。

「多ッ！！なんだこのバイク集団！？」

なんかカブトの世界のゼクトルーパーを思い出すな…。

「なんかカブトの世界の兵隊に似てますね…」

うん。もういいからな。

なつみかんが俺の心をリピートしたその時、

「あれはライドベンダー隊です」

後ろから声！なんだ！？全くけはいをかんじなかったぞ！？

「…誰だ」

「失礼しました。私は外街エリ。斑鳩ファウンデーション会長秘書です」

「い、斑鳩ファウンデーション？」

この世界には来たばかりだからしょうがないが、ユウスケが全く聞いたことのない名前に困惑していた。

簡単にうろたえるなよ…クウガだろ…

「あのライドベンダー隊はヤミーの被害を最小限に押さえるため派遣されました」

ってことはヤツらは使いつ走りか。

よく見ると赤い鳥やら青いタコやらが飛んでヤミーを攪乱している。

その間にバズーカみたいな武器で攻撃…よくできたコンビネーションだな。

だが…

「これじゃ倒すのは無理だな」

「え？何でだ士。あのヤミーってヤツ手も足も出てないじゃんか」

「どの攻撃も決定打に欠ける。この戦い方じゃ時間稼ぎにしかないぞ」

「それでいいのです」

「それでいい？」

「どういうことだ？」

「倒す気がないのか？」

「彼らは『ヤツ』が来るまでの時間を稼いでいるのです」

「『ヤツ』？」

「オーズです」

「「「!」？」」」

「オーズだと！？それならあの戦い方にも納得できるが…」

「じゃあなぜ斑鳩は俺たちにオーズ探しを頼んだんだ？」

「オーズはヤミーと戦うために出てくる。それならわざわざ探す必要なんてない。」

「いや…それが最近…」

「？」

「急に口ごもり始めたぞ？」

訳有りか？

「一体どうしたん…」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ♪タ・ト・バ♪タ・ト・バ♪』

この音声は…来たな。

「オーズだ！」

ライドベンダー隊の誰かが叫んだ。
だが…様子がおかしい。

「はあっ！」

「「ぐわああああ…!!」」

ッ!!…なんだ!?

オーズが手近なライドベンダー隊の2人を襲い始めたぞ！
これは…

「様子がおかしい!!いくぞユウスケ！」

「え?あ、わかった！」

「「変身!!」」

『K a m e n R i d e D A C E D E !』

俺はマゼンダのボディにバーコードのようなマスクをした仮面ライダーディケイドに、ユウスケは赤いクワガタのような仮面ライダークウガに変身した！

「いくぞ!!俺はオーズをやる!ユウスケはヤミーを頼む！」

「ああ！」

まず俺はオーズに特攻！
そして…

「くっえ！！！」

『Attack Ride Slash！』
「ぬうッ！」

剣の軌道を5つに増やした斬撃で切りかかる！
だがオーズも両腕のトラの爪のような武器、トラクローを交差させ
防御してきた。

「やるじゃねえか…」

「フン！」

『タカ・カマキリ・バッタ！』

お。メダルを変えてきたな！
オーズ・タカキリバは腕についたカマキリソードでさっきとは違う
素早い攻撃をしてきた。
速い！

「ぐわッ！」

軽く吹っ飛んだな…
近距離はまずい！

「ならこいつだ！」

『Kamen Ride KIBA！』

『Form Ride KIBA BASSHAR！』

俺はコウモリを彷彿とさせる戦士、仮面ライダーキバに変身し、水を操る銃使い、キバ・バツシャーフォームに姿を変えた。

「はっ！」

「ぬおッ！」

水球を放つ銃、バツシャーマグナムで距離を離しつつオーズ・タカキリバを撃ち抜いた！

やはり遠距離には対応できていないな。

一気にいくぜ！

「これで終わりだ！！」

『Final Attack Ride K-K-K I B A!』

俺は特殊な水のフィールドで敵を撃つバツシャー・アクアトルネードをオーズに放った！

だが…

「ぬん！」

『タカ・トラ・バツタ！タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』
『スキヤニングチャージ！』

ここでタトバキック？

一体何を…と思っていると、

「うおお！」

タトバキックで水球の軌道を変えた！？

俺はあまりの驚きで動きを止めてしまった。

その隙に、

『タカ・トラ・チーター!』

オーズはタトラーターにメダルを変え、俊足を活かし逃げてしまった。

まあいいか。

あいつも本気じゃなかった気がする。

コンボとか使わなかったしな。

「そういえば：ユウスケの方は終わったか？」

少し離れた場所を見ると、

「うらあッ!」

「ぐああああああ!!!!」

ちょうどマイティキックでヤミーを粉碎していた。

戦闘描写がこれだけとは：

主人公の俺とは大違いだな。

「士!オーズは？」

「ん?ああ、逃げられた」

「そうかあ：」

まあ落ち込むものしょうがないな。

捕まえて斑鳩とかいうヤツに突き出せば2000万な訳だし。

だが俺はあまり気にしていない。

それよりも：

「おい、外街エリとかいったな」

「はい」

「俺を斑鳩に会わせろ。話がしたい」

こんな状況でオーズを探させたんだ。

確実に裏がある。

「…明日には対談をセットできますが」

「今日にしろ」

「ダメですよ土君！無理を言っちゃ！」

いつの間にか近くまで来ていたなつみかんが何か言っていたがガン無視。

こんなに迷惑をかけられてるんだ。

少しくらい無理を通さねば。

「被害者はこっちだ。無理にでも今日中にしろ」

「その必要はない！！」

うおっ！なんだこのでかい声！

そう思い後ろを振り向くとそこには…

斑鳩鴻星がいた。

第二章（後書き）

こんばっばー！

剣崎シンジです。

二章ですー！

他の皆さんの作品を見てみると自分の下手さがよくわかります…

そして一章が短すぎる！

だから二章は少し長くしてみました。

またオリキャラ紹介です。

外街エリ（そとまちえり）

里中エリカのリイマジです。

実はこのキャラは一筋縄ではいきません。

ちなみに斑鳩さんは激辛料理をよく作ります。

そのせいでかなりの辛党です。

好物は麻婆豆腐（当然のように激辛）

次回はグリードのお話を少々…

第三章（前書き）

士「今日はゲストを呼んでみたぞ…芦川シヨウイチさーん？」

シヨウイチ「俺を呼ぶなあああ!!」

ユウスケ「って叫びでお馴染みの芦川シヨウイチさんです！」

シヨウイチ「お馴染みじゃない！」

夏海「特技はベルトむしり…」

シヨウイチ「違ああああう!!」

士「違わないだろ…」↑被害者

ユウスケ「そうだ士。早くあらすじ終わらせないと鳴滝さん起きるんじゃないか？」

鳴滝「…」↑シヨウイチを無理矢理呼ばされた挙げ句シヨウイチに

ボコられて気絶中

夏海（いい気味です）

士「なつみかん何か言ったか？」

夏海「いえなにも」

シヨウイチ「…早く帰りたいのだが」

ユウスケ「あらすじー！」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事!!!」

士「1つ！ライドベンダー隊と遭遇！…やっぱりゼクトルーパーに似ている…」

ユウスケ「2つ！オーズと戦闘！だって人襲ってんだもん」

シヨウイチ「3つ！斑鳩登場！…あいつ何者だ？」

」

第三章

麻婆豆腐とメダルとグリード

オーズとの戦闘を終えた俺たちは斑鳩ファウンデーション会長室に斑鳩と対談をしに来ていた。

そう：対談をしに来ていたんだ。
なのに：

「なんで俺たちは麻婆豆腐を作っているんだ！」
「いやオレは知らないよ！？」

斑鳩と一緒に麻婆豆腐を作っていた。

なんでも秘書の外街がまだ昼飯を食べていなかったみたいで会談はそのあとになったのだが：いつの間にか俺たちも作らされていた。

「それはそうと土君：斑鳩さんが：」
「斑鳩がどうした？」

そういつて後ろのバカでかいキッチンで料理している斑鳩を見ると：
げっ！唐辛子を超入れている！
：なんであいつの周りに大量の唐辛子のから袋があるんだろうな。
幻覚であることを祈る。

「ち、ちょっとあの量は：」

あのユウスケでさえ引いてる！

「こんなもの外街が食えるのか…？」

「絶対に無理な気がする」

「私もそう思います」

その後、みんな思い思いの麻婆豆腐を作った。

俺となつみかんは比較的まとも。少し俺の方が辛いくらいだ。

だがユウスケは、

「カレー味…」

なぜだ！なぜ麻婆豆腐をカレー味にした！

それなのに、豆腐と辛めのカレーがマッチして美味い…

ま、まあ俺の方が美味しいな！

そして最後に残ったのは斑鳩の色が異常に赤い麻婆豆腐。もはや豆腐が着色されている。

絶対に食いたくない…

だがそれを外街はなんの躊躇もなく口に入れた！

し、死ぬぞ！

「…やっぱり会長の麻婆豆腐は最高です」

…こいつの味覚はどうなっているんだああああ！！

ショウイチが食べたらアギト・バーニングになるくらいの唐辛子だぞ！

「ああ、そうだ言い忘れていたね」

斑鳩が話しかけてきた。

今度はなんなんだ。

「外街クンは辛党だよ」

…だろうなああああ！！

あれで甘党とか言われても信じられねえよ！

俺たちが本題を思い出したのはこの30分も後のことだった。

「それでオーズのことだか…」

早く事情を説明してくれ。

これ以上何も知らないまま巻き込まれるのはごめんだぜ。

「実は少し前までは共に戦っていたのだよ」

「それは知ってます。外街さんが教えてくれましたから」

「そうか…じゃあオーズの能力のことを話そうか」

能力？…ああ、メダルのことか。

「オーズはオーメダルという800年前にとある錬金術師が作ったメダルを使って変身している。そしてオーメダルにはコアメダルとセルメダルの2種類が有り、オーズはコアメダルを使い変身している。その他にもバースという仮面ライダーがいるが、彼はセルメダルを使っている」

へえ、そんなライダーがいるのか。

「そのコアメダルを核とした欲望の怪物、グリードというモノもいるのだが、今は関係がないので割愛しておこう」

面倒くさいから飛ばしたと思うのは俺だけだろうか。

「このオーメダルは、今の技術では製造ができない。少し前まではそれが常識だった」

「少し前まで？」

「コアメダルの製造に成功した者がいる」

なんだと!?

「その者の行方はわからないが、名前は竜ヶ崎シンゴ。ウチの研究科で働いていた」

「で、それがどうかしたのか？」

確かにすごい話だが、あまり関係がないように思える。

「実はその頃からのだよ…オーズが人を襲い始めたのは」

「ってことは…お前はその竜ヶ崎ってヤツがオーズに何かしたと思っ
っているのか？」

コアメダルを介しての洗脳とか？

「そうだ。もしくは人を襲うオーズはそのレプリカのコアメダルを
使った偽者か…」

偽物…そういう見方もあるな。

「オーズのベルトは作れなかったのか？」

今のはユウスケだ。

「それが分かれば苦労はしないよ…」

「だろうな。分かれば本物か偽者かくらいは分かるからな」

「ってことは何もわかってないのか」

…うん、俺が言うのもなんだけどな。

もうちょっとオブラートに包もうぜ？

「…とりあえずオーズを探してくれないかね」

「…どうせもう説明がめんどくさくなっただんでしよう」

「はっはっは。何を言うんだ外街クン。そんなことはないよ」

棒読みだし…

まあ迷っていても仕方がない！

オーズを探しにいくか！

くどある廃墟く

ここは斑鳩ファウンデーションがある街の隅。

そこでは人ではないモノ達が生活していた。

「最近オーズはどうしたんだろうね…」

黄色い猫を思わせる風貌をしたグリードのカザリが呟いた。
すると、

「俺たちのヤミーを助けていることか？別に害は無いのだから問題ないだろう」

それに緑の昆虫系グリードのウヴァが返答した。

「だけどねえ…急にああなると少し薄気味悪くない？裏があると思えてならないんだよね…」

「考えすぎではないか？」

「ならいいんだけど…」

その会話の横では灰色を基調としたグリードのガメルが、

「メズールう…」

といなくなってしまった青い水棲系グリード、メズールを想って落ち込んでいた。

「…まあ確かに、メズールはどこに行ったんだろうね」

「俺はそのうち帰ってくると思うが…」

「メズールうー！」

「泣き始めたし…」

ああもう面倒だなあ…とカザリは思いつつ、新たな不安要素を口にした。

「あとオーズはいるのに、なぜかアंकが一緒にいないんだよ」

「そういえば…俺のヤミーの時もそうだったな…」

「まさか、オーズとアंकは既に決別している…？」

「別行動しているだけではないか？」

「でも僕たちのヤミーを助けてアंकにメリットがある？」

「それならオーズもだろう」

「よく分からないね…」

そこでウヴァが話題を変え、

「そういえばあのヤミーは怎么样了？」

「順調に育ってるよ。もうすぐ行動できる」

「そうか。俺も新しいやつを作るか…」

そしてグリードは新たなヤミーを作るために街へ向かった…

第三章（後書き）

三章キターッ！！な剣崎シンジです。
ちやおっすー。

お詫び

本当は前回の話し通りグリード中心にするつもりでしたが、欠員で映えないメンツになってしまったので伏線に使うために最後に入れました。

申し訳ありません。

今回なぜか頭良さげに見えるウヴァさんですが、普通にバカです。
グリードの頭脳派キャラと言えばアंकとカザリとメズールですね。

メズールは少し2人に劣りますが。

そのメズールですが、ちゃんと行動しています。
個人的にはメズールが好きなので早く出したいです。
アंकは：そのうち出ますよw w w

それと、平成仮面ライダーを総て観てきたボクですが、フォーゼだけは観る気が起きません：
どなたかボクにフォーゼの面白さを教えてくれませんか？
ちなみに一番好きなシリーズはカブトです。
かっこいいですよー♪

次回はオーズ再び！？

第四章（前書き）

士「俺、この話で鳴滝を殺すことに決めたんだ…」

ユウスケ「個人的にはやめてほしいけど…アークルくれたし」

夏海「私は殺ってほしいです」

ユウスケ「夏海ちゃん!？」

士「…今回のゲストはこちら!」

モモタロス「俺はいつでもクライマックスだ…」

士「なぜ貴様がいる」

モモタロス「ブヘラボツ!」

ユウスケ「…すいません。間違えたみたいなので本当のゲストさんどーぞ!」

海東「やあみんな」

夏海「あ!本編で全く出番が無くてついにはゲストで出てきた海東大樹さんです!」

海東「ひどっ!」

ユウスケ「でも確か…初期設定ではもう出てきてるはずなのに…」

士「作者いわく、動かしにくくてほっといたらそのままになってた、だそうだ」

ユウスケ「ああ!そこで救済策として…って訳なのか!」

夏海「可哀想ですねぇー♪」

海東「…もう嫌この面子」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事!」!」!」

士「1つ!斑鳩と麻婆豆腐を作る!…食わされなくてよかったぜ…」

ユウスケ「2つ!斑鳩さんにオーズの話を聞く!」

海東「3つ!グリードの怪しい動き!…結局グリードについて説明あった?」

士ユウ夏「「「ない」」」

第四章

幽霊と虎場と黄色グリード

「ぎいやああああ！！！」

「出たーッ！！」

俺たちは薄暗い森の中を爆走していた。
事の発端は一時間前に遡る…

「ホントに広いなよなーこの街」

俺たちは斑鳩との話を終え、オーズを探しに街に出ていた。
そんなときにポツリとユウスケが言ったことがこれだ。

「今更なんだ…この街に来てもう5時間近く経っているぞ」

そう…色々あって街をあまり歩いてはいないがここに来て5時間経っている。

俺たちどんだだけ斑鳩のトコにいたんだよ…

「でもさあ？まだ街のことよくわかんないよな」

「まあそうだな」

「なにか嫌な予感がします…」

奇遇だななつみかん。

俺もなんだ。

「探検しようぜ！」

「…は？」

そして今に至る。

過程？…恐ろしくて思い出したくもないぜ。

「ああ…イライラするげぶあッ！」

なんか紫の蛇みたいなヤツを蹴り飛ばした気がするが無視！
それよりあいつから逃げなければ！
というか…

「なんでビートルファンガイアの霊が追いかけてくるんだよおお
！！！！」

そう、今俺たちを追っているのは、ワタルの父のビートルファンガイアだった！

しかも幽霊！

ワタルワタル言ってるし！

ちなみにワタルとはとある世界であつた仮面ライダーキバに変身する子供だ。

細かいことは割愛。

もつと説明がほしいって？

ははは♪状況見ろよ☆

「士！前見ろ、前！」

「は？」

ユウスケに言われ前を向く。
すると目の前に黒髪短髪の青年が！

「あぶなあああい！！」

「ん？　うわあ！」

おれはそいつにぶつかつてない？
って後ろにいる！？

速すぎるだろ！？

あ。

そいつに当たる軌道でビートルファンガイアが突っ込んできたなあ……。

「危ないなあ……ちゃんと前は見た方が……」

「そこにあんた！ 後ろ！」

「後ろ？」

そいつは振り返ると、特に驚かずに、

「なんだこいつ？」

「ワタルううう！」

「そいや」

「ぐふっ！」

「ええええええええええええ！！！」

蹴り飛ばしたあ！？

しかもダメージでビートルファンガイア消えたし！
なんだこいつ！？

「なんだったんだ今の…あ！大丈夫ですか？」
「あ、はい。本当にありがとうございます…」

なつみかんが少し引きながら礼を言う。

ユウスケなんか驚きすぎて言葉が出ていない。

「ならよかった。ボクは虎場エイジ。よろしくね♪」

思ったよりフレンドリーだな…

まだ当然怖いが。

「俺は門矢士だ」

「私は光夏海です」

「オレは小野寺ユウスケ」

各々自己紹介を終えたところで、エイジは質問をしてきた。

「皆さんはなんでこんな山奥へ？」

山奥まで来てたのか…

山に入っただけで追いかけられたのにな…

「さっきのお化けに追いかけて…」

「あー…時々出るんだよね、ここ」

「もうこんな所にいたくないです！」

同感だ…と思っていたその時、

「しゃあなあ！！」

猫が威嚇するような声が聞こえたので、そちらを振り向いてみた。すると、ちょうど猫みたいなヤミーが突進してきているところだった。

「あ、でかい猫だー♪」

「「「いやいやヤミーだろ（ですよ）！？」」「」」

「え？マジで？」

こいつホントにどうなってるんだ…？

まあいい。

とりあえずはヤミーを倒そう！

「エイジ！下がってる…って危ないから前にいくな！！」

「まあボクに任せて下がってなってる」

そしてエイジが取り出したのは3つの穴がついたドライバー…まさかこいつが！？

「変身！！」

『タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

「え、ええーっ！？エイジさんがオーズ！？」

「うん？そうだけど？」

でもこいつが人を襲うかあ？

まあ今はいいか。

「お手並み拝見だな」

「よーし！さくつと倒すぜ！そりゃあ！」

エイジはバッタレッグで翻弄しつつトラクローで猫のヤミーを切り

裂いていく!

…助けは要らなそうだな。

「弱いなこのヤミー! じゃあ倒すよ♪」

『スキヤニングチャージ!』

「せいやあああ!!」

3つの輪を通り抜けながら、タトバキックで猫のヤミーを倒そうとするエイジ。

しかし、急に1と2、2と3番目の輪の間に、木や岩が飛んできた!

「うわっ!？」

そのせいでタトバキックの軌道が逸れ、猫のヤミーに当たらなかった。

一体何が…

ッ! 木の裏に気配!

「誰だ!」

「…そのヤミーはやらせないよ。まだ成長途中なんだ」

出てきたのは猫を思わせる黄色の『何か』だった。

「グリード…!」

グリード! あいつが…。

斑鳩に説明をハシヨられた悲しい生き物か…。

「グリードって何なの!？」

「グリードは…簡単に言えばヤミーの親玉かな? あいつはカザリッ

て名前だ」

親玉か…なら強いんだろう。

「エイジ。手を貸すぞ」

「え？ どういう…」

「変身！！」

「じゃあオレも！ 変身！！」

『Kamen Ride DECADE ！』

「ええ！？ 変身した！」

「オーズの仲間かい？ …まあ一緒に倒すけどね」

そう言うとかザリはカードと四角い箱のようなモノを取り出した。
あれは…！

「ラウズカードだと…！？」

仮面ライダーブレイドが使うランプのようなカード、ラウズカードだった。

なぜこの世界にラウズカードが…！

「知ってるの？ …これは帽子を被ったおじさんにもらったのさ」

…絶対鳴滝だな。

いつか殺すあの野郎。

そしてカザリは右手首に箱のようなモノ、恐らくラウザー…ラウズカードをスキャンするためのモノ…を付け、カードをスキャンした。

『Slash』

その音声と共に双剣がカザリの両手に召喚され、斬りかかってきた！
速ッ！

「はぁッ！」

「くっ！」

俺はなんとかライドブッカーをソードモードにして防ぐ。
だが、

「甘いよ！」

「ぐぁぁッ！！！」

「土っ！」

がら空きになった腹を蹴り飛ばされた。

いってえ：

今度はエイジに向かってカザリが横薙ぎに剣を振るう。

「君の番だ！」

「おわっ！」

うまく右はかわした。

だが、左は直撃してしまう！

「うわぁッ！」

「エイジ！この…超変身！！！」

カザリがエイジを吹っ飛ばした隙にユウスケは青の戦士、ドラゴンフォームに姿を変え、近くに落ちていた木の枝でドラゴンロッドを生成し、素早い動きで一氣にカザリに詰め寄った！
だが、

「じゃあこれで」

『M e t a l』

カザリがカードをスキャンしてしまう。

するとユウスケがロッドで殴り付けるも、弾かれてしまった。

「硬ッ！」

その衝撃でユウスケはロッドを手放した。
そこに、

「隙有り！」

「ぐあッ！」

カザリの一閃！

ユウスケまでやられた…

それなら…！

「速さには速さだ！」

『K a m e n R i d e 5 5 5 !』

『F o r m R i d e 5 5 5 A c c e l !』

俺は仮面ライダーファイズに変身し、ファイズ・アクセルフォームにフォームチェンジした。

これで十秒だけだが超高速で戦える…！

「僕はもっと速くなるよ」

『M a c h』

「いくぜ」

『Start Up』

俺とカザリは高速の世界で殴り合った。
だがこっちはクロックアップと渡り合ったアクセルフォームだ。
段々とカザリは追い付かなくなってくる。

「は、速い！」

残り時間もあとわずかな…
よし！

「決めるぜ！」

『Final Attack Ride 5—5—5—555！』
『three』

俺は足からポインターを飛ばし、カザリに狙いを定める。

『two』

そしてそのポインター目掛けて蹴りを放つ！

「うおおお！！！」

『one』

俺は一度ポインターの辺りで姿を消し、カザリの後ろに出てきた。
そして、

『Time Out』

「ぐわあああ！！！」

タイムアップだ。

だが、まだカザリはやられていない。

「しぶといな…」

「強いねキミ…じゃあしょうがないな…逃げさせてもらうよ…」

『Thunder』

すると、目の前に雷が何発も落ちてきた！

眩しッ！

そして、雷が止んだ頃にはカザリの姿はなくなっていた…

第四章（後書き）

こにゃにゃちわ〜♪

剣崎シンジです。

更新が昨日はできませんでした。
申し訳ありません。

えーと今回は虎場エイジさんが出ました。

これで大体落ちが読めてしまったかと思いますが、頑張って予想を（いい意味で）裏切りたいので、飽きずに読んでもらいたいです。

カザリがラウズカード使いました！

ちなみにあれは一枚ずつしか使えなくなっています。（だからライトニングスラッシュとか使えません）

その代わり、カードの効果は強化されています。

だからファイズ・アクセルについていける速度が出せました。
でもやっぱり少し遅いですけど。

全然関係ないのですが、最近急にオーディン対ベルデの闘いが見てみたくなりました。（実際はやってません）

皆さんはどんな闘いがみてみたいですか？

次回はアंक登場！そしてオーズの真相が！？

第五章（前書き）

士「…オンドウルルラギッダンデイスカ！」

ユウスケ「Σどうしたいいきなり！？」

夏海「…実は今回出てきたあの人の代わりに乾巧が出る予定だったらしいですよ」

ユウスケ「…それが？」

士「乾巧だったら熱いウドンでも啜らせておけば勝てたのに…」

ユウスケ「無理だな」

夏海「じゃあ今日のゲストにいつてみましょう！」

ユウスケ「今日のゲストはこちら！」

アスム「こ、こんにちは」

士「人畜無害キターッ！！」

ユウスケ「アスムくんです！」

夏海「…久々のまともな人…！」

ユウスケ「じゃあこっちもまともな質問しなくちゃ！」

夏海「えーと…ご趣味は？」

士「お見合いか！？」

アスム「鍛えることです！」

ユウスケ「…尊敬している人は？」

アスム「師匠…海東さんです！」

ユウスケ「あんなヤツ、尊敬しちゃダメだよアスムくん」↑笑顔で

アスムの肩を掴んでいる

夏海「これ以上はアスム君に悪影響なのであらずじにいきましょう
！」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事…！！」」

士「1つ！幽霊に追いかけられる！しかもワタルの父さん！」

ユウスケ「2つ！エイジさんと遭遇！ってオーズに変身した！？」

アスム「3つ！グリードのカザリと戦闘！…ラウズカードを使って
までして士さんに勝てないなんてただの雑魚ですね」
カザリ「言わないでーッ！！」

第五章

アंकとあいつと2人のオーズ

「さあーって！カザリは士が追っ払ってくれたし…待てやコラ」

エイジの言葉と共に、びくうッ！という効果音が似合う挙動で、そこそ逃げようとしていた猫のヤミーが動きを止めた。

「逃げれると思ってんの？…とりあえず士。あいつの中には人が入ってる。引っ張り出せるか？」

人か…あいつは太ってるからな…

「…外の肉が邪魔だな」

「それなら高速で同じ場所を攻撃すると段々削ぎ落とされてくよ…フィニッシュはボクがやるから残しといてよ♪」

…笑顔が怖すぎる…

ていうかまた高速戦か…

「それならこいつだな」

『K a m e n R i d e K A B U T O !』

おばあちゃんは言っ t (r y
これなら天の道を司れたり…はしないが、クロックアップならでき
る。

原作ネタ？

なにそれ食えんの？

Attack Ride Clock Up!

これを使うと、まるで周りが遅くなったかのように感じる。

この景色は好きだ。

：誰も俺についてこれないからな！
よしこれで猫のヤミーに近づいて：

「はあああ！」

殴って殴って殴りまくる！

するとセルメダルが剥がれてきて中の人が見えてきた。

そろそろいいだろ。

Clock Over

「ほッ！」

そして俺はクロックアップを解除して一気に中身を引き抜く！

大量のセルメダルと共に人が出てきた。

よっしや！

するとエイジが前に出てきて、

「あとはボクに任せろ……カザリへの恨みつらみ、責任取ってお前が受けるッ！」

「え、ちよつとエイジさん……？」

『スキヤニングチャージ!』

「砕け散れええええええ！！！」

「みぎやあああ！！！！」

…エイジ容赦ねえーッ！

タトバキックで粉々だよあの猫！

…カザリに対する恨みどんだけたまってたんだよ…

もう変身解除していいよな…

そして何気なく周りを見てみると、木の影に何か光っているものが。

「何だあれは？」

近づいて手に取ってみると、それは黄色のメダルだった。

「これは…ライオンのコアメダルか…」

「士ー！なんか銀色のメダルがいっぱい落ちてるぞー！」

お、ユウスケはセルメダルを見つけたみたいだな。

…とりあえずエイジが敵か味方か見極めるまでこいつは持っておくか…

「士ー？」

「今行くから待ってろ！」

ユウスケの方へ行くと、ヤミーがいた場所に大量のセルメダルがあった。

あのヤミーこんなにメダル貯めてたのか…

にしては弱かったな…

それと…見たことないヤツもいた。

茶髪でガラの悪い青年だ。

「おいユウスケ…こいつ誰だ？」

「いや…俺もよく…」

「そいつはアंकだよ」

ユウスケじゃなくてエイジが答えてくれた。

アंक…？

外国人か何か…？

「おいエイジ！ここは一応左倉シンタロウって名乗るべきだろうが！」

左倉シンタロウ…？

アंकじゃないのか？

「あー…こいつは左倉シンタロウって人にくっついたグリードでアंकってゆーんだ。左倉さんはライドベンダー隊の隊長らしいよ」
「今は俺が隊長だ！それよりこいつがさっき言ってたカザリを退けたヤツか…？」

アंकがじろじろ見てくる。

気持ち悪い…！

それよりも、

「何かこいつとキャラが被ってる気がする」

…ああああああ…！！

もう駄目だもうアウトだ！

完全にキャラが被ってしまった！

「つ…士…？そんなに気にしなくても…」

「ユウスケ！お前は事の重大さに気づいてないんだ！」

「そうだ！キャラが被るってことは『このシーンでつつこみはこい

つがいるからこいつはいいや』みたいなことが起こり得るってことなんだぞ!!」

「…ごめんな、色々と」

そんなことを話しているとき、突如森に殺気が充満した。
何だ…？

「おいお前ら…一応用心しとけよ」

「あれ？士、上からなんかきてるよ」

は？

って上から灰色のオーロラがあああ!!!!

「うおッ！」

「何これ？」

エイジも飲まれたし！

どこに飛ばされるんだ!？

「ここは…」

俺はまるで宇宙のような場所に来ていた。
前にも来たことがあるような気がする…
確か…

「最初にカードをもらった場所だな」
「その通りだ」

後ろから声が！

「誰だ！」

「…俺は剣崎一真…貴様を殺させてもらう！」

はぁ！？いきなり何だよ！？

だが雰囲気はやバめだな…

まあやることは決まってる。

「はっ！お前に俺が殺せるか？」

「楽勝だな…本気を出すまでもない」

言うじゃねえかこいつ…！

「それなら本気を出せないまま倒されちまうんだな！」

「えーとさぁ…ボクも闘っているの？」

「いいぞ。全く問題ない。むしろ2人でないと手応えが無さすぎる」

こいつ本気で殺す。

破壊者らしく壊してやる！

だが…

「「変身！！」」

『Kamen Ride DECADE！』

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

「…変身」

『Turn Up』

「何ッ！？何故お前が…カズマじゃないヤツがブレイドに変身する！？」

そう、あいつはカズマが変身するはずのブレイドに変身した。
カズマとは俺が旅をした世界の内の1つ、ブレイドの世界の人間だ。
よくチーズって言われてたなあ…。

「お前が知っている世界が全てではない。それだけだ。いくぞ！」

くっ！今は気にしてられないな！

あいつを倒すことに集中しなければ！

ブレイドは接近戦特化だからな…

まずは…

「こいつだ！」

『Attack Ride BLAST!』

幾重にも分かれた銃撃が多方面からブレイドに襲いかかる！

「ふッ！」

が、体を銃撃と銃撃の間に割り込ませることで、そのまま突っ込んでくる。

闘い慣れてるな…

それならあえて接近戦だ！

2対1だけどな！

「エイジ！」

「わかってる！」

『タカ！カマキリ！バツタ！』

「せいッ！」

「甘いな」

「ぐわっ！」

オーズ・タカキリバはカマキリソードでブレイドに斬りかかる。
が、かわされて一撃食らわさせてしまう。

まあ、エイジには悪いがここまでは計算通りだ。

エイジには悪いが。

なつみかん達の方も何か起こるかもしれないからな。

短期決戦だ。

『Final Attack Ride D—D—D E C A D
E!』

「うおおおッ！」

「…ふん」

『Thunder・Kick・Mach Lightning So
nic』

そこで、ブレイドも雷を纏った高速キック、ライトニングソニック
を放ってきた！

だがな、まだあいつがいるんだよ！

「…この野郎おおお!!!」

『スキヤニングチャージ!』

「せいやあああ!!!」

「ぐおおッ！」

よっしゃ直撃！

うまくいったぜ。

まずはエイジにわざと攻撃させて怒らせ、その怒りの力を相手にぶ
つける！

ちなみに俺のはブラフだぜ！

「…中々やるな」

何ッ！？まだ倒せてないのかよ！

「そろそろ本気を出してやる」

『Absorb Queen Evolution King』
「キングフォームか…」

まさかなれるとはな…

このままじゃまずいな。

その時、エイジがブレイドに突っ込んでいつてしまった。
まずいッ！？

「待て、エイジ！！」

「そらッ！」

エイジがカマキリソードを振り下ろす。

肩に直撃！

…だがやはり、

「効かんッ！」

「うわあああ！！！」

全く効いていない。

鎧に傷すらついていない。

しかもただの拳でオーズ・タカキリバが15メートル程吹っ飛んでしまった。

どんな馬力だよ…！

「くそ、力で無理矢理押すか…！」

『Kamen Ride HIBIKI!』

「はぁッ！」

「ふん！」

俺は力に定評がある鬼の戦士、仮面ライダー

響鬼に変身し、パンチを繰り出した！

ブレイドも同じくパンチをして、俺の拳と衝突した！
が、

「ぐぁぁぁ…！」

力がライダーの中でも突出している響鬼ですら吹っ飛ばされる。
どうすればいいんだ…！

「そんなものか…もういい」

『Royal Straight Flash』

ブレイドと俺の間に5枚のでかいカードが配置された。
やられる…！

その時、また灰色のオーロラが現れ、人が出てきた。

「…一真、もうそれ位でいいんじゃないか？」

「城戸か…」

「オレはコイツらは十分強いと思う。お前をキングフォームにさせ
たぐらいだからな」

何だ…？状況がよく分かん…。

今俺を殺そうとしたヤツの仲間っぽいヤツが俺たちを擁護している
…？

「もうコイツらなら大丈夫だろう？」

「…そうだな。すまない。少し楽しくなってしまったな」

すると、城戸と呼ばれていたヤツがこちらを向き、

「すまなかったね、門矢士くん。本当は君の、いや君たちの力を試したかったんだ」

「試す…？」

「そう、あいつに勝てるかどうかね…」

あいつ？誰のことだ？

頭の中を疑問符だらけにしていると、城戸がカードを取り出してこちらに投げてきた。

「これをあげよう」

「…これは」

「君が本来持っているべき力だ」

そのカードには、クウガからディケイドまでの10人のライダーが描かれていた。

そうか…

「大体わかった」

やるべきこともな。

「とりあえず、もとの場所に戻してくれ」

「そうだな。…頑張れよ」

そして俺たちは再び灰色のオーロラに包まれていった…

「土！」

「土くん！」

目を覚ましたら、そこはもと居た森の中だった。
戻ってこれたか…

「やっと帰ってきたか。オーズと…ディケイド」

後ろから声がした。

知らない声で。

振り向くとそこには…

オーズが立っていた。

第五章（後書き）

おっはーっ！！（現在は朝ではありません）

そろそろ挨拶ネタが尽きてきた剣崎シンジです。

真にすいませんが、

これから2日に一回くらいの投稿スピードになると思います。
ご了承ください。

剣崎さぁーん！何やってんのー！な五章です。

ホントに今回は剣崎さん無双でした。

ついでに城戸さんも出てきましたが。

城戸さんが士に何を渡したかはまだ秘密です。

もうわかった人も出てくるのかな？

それと士はまだコンプリートフォームになれません。

ネガの前の設定です。

そんな士にキングフォーム使う剣崎さんマジ鬼畜。

何気にまだライオンを渡していない士。

次回渡しますよ多分www

次回はオーズvs. オーズ（時々ディケイド&mp, クウガ）！
偽物の正体が明らかに（なるかもしれません）！？

第六章（前書き）

士「…俺が負けた…だと？」

ユウスケ「誰に？」

夏海「剣崎一真さん」

ユウスケ「…そりゃ負けるだろ…」

士「俺は破壊者なのに…」

士「今日のゲストはこちら！」↑笑いのツボで完全復活

カズマ「お久ー！チーズ！」

士「チーズじゃないチーズだ！」

ユウスケ「…これもお馴染みだよな」

夏海「はい」

ユウスケ「…今回のゲストは士をボコしたヤツと同じブレイドの剣立カズマさんです」

カズマ「そんなことあったの！？」

士「…orz」↑再発

カズマ「まあディケイド程度でブレイドに勝てるはずか無いんだよね」

士「もう死にたい…orz」

夏海「Σ早まらないでください！」

ユウスケ「あらすじー」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事…！！」

士「1つ！猫ヤミーをエイジが爆碎…！怖し」

ユウスケ「2つ！ブレイドと闘い敗北！剣崎さんマジオンドウル」

カズマ「3つ！謎のオーズが現れる…！もう大体わかったの俺だけ？」

士「言わないでくれ頼む！」

第六章

コンボと敗走とおやすみなさい

俺の前にはオーズがいる。

右にある木の近くにエイジが寝ているのに、だ。

「…お前は誰だ？」

「竜ヶ崎シンゴ…まあ言っても分からないだろうがな」

…いや。そんな事はないぞ。

その名前には聞き覚えがある。

斑鳩のおっさんが確か言っていたな…

『コアメダルの製造に成功した者がいる』

『その者の行方は分からないが、名前は竜ヶ崎シンゴ』
つてな。

「何故ここにいる？」

「偶然だ」

俺はディケイドドライバーを装着し、ディケイドのカードを取り出した。

「それなら質問を変えるか。何故ヤミーを助け、人を襲っていた？」
「！！！」

そう言うとは偽オーズは驚愕した。

気づいてないとも思っていたのか？

…こいつ案外バカだな。

ていうか10も20もオーズがいてたまるか！
すると、

「…ひやははッ！！よくわかったねえ！！」

「ッ！？」

何だこいつ！？急に人が変わりやがった！？

「まあバレたんなら仕方ないねえ…殺すか」

「ッ！？変身！！」

『K a m e n R i d e D E C A D E !』

殺すだと？

前に負けたのにどこからその自信が来るんだ？

その時、

「ううん…ここどこ…？」

エイジが目を覚ました。

いいタイミングだ！

こいつを使うか！

「士…？オーズがいる…って、え！？オーズ！？」

「エイジ！こいつはお前のフリをして人を襲っていた偽物だ！」

「は？偽物？…俺の？…そうか…」

上手くいったぞ！エイジの怒りのボルテージが上がっていく！
すると、エイジはオーズドライバーとメダルを取り出し、

「お前殺すわ♪」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

オーズ・タトバコンボに変身して偽オーズに殴りかかる！

すると偽オーズもドライバーのコアメダルを抜いてメダルを取り出した。

銀色の3枚のコアメダルを。

まさか！

「見せてあげるよ…本当のオーズをねえ！！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーズッ♪サッゴーズオオ！！』

銀色の光が視界を遮った。

その光が収まると、そこにいたのは…

銀色の堅牢な鎧を身につけ、頭にサイの角、腕には巨大なゴリラの腕、脚はサイの脚を思わせる仕様になっているオーズ・サゴーズコンボだった。

そして偽オーズ・サゴーズコンボは、

「ウオオオオオオオ！！！」

いきなりドラミングを始めた！

するといきなり上から重圧がかかり、跪くような体勢になってしまった！

「ぐあっ！」

「…これは重力操作か」

「ご名答！さあこれで動けないよなあ？ ゆっくりなぶってやるよお！」

まずいな…動けねえ。

だがこれくらいならパワーがあればなんとかなるな。

『Kamen Ride DEN-O!』

『From Ride Axe from!』

俺は斧の意匠をした黄色と黒主体のライダー、仮面ライダー電王・アックスフォームに変身し、

「うおおッ!!」

パワーに特化したフォームらしく、無理やり立ち上がる!

「はあ? 立てんの!? わっけわかんねえー!」

訳分かんないか。

それなら…

「そのまま倒されとけ!」

そう言って手に持った斧、デングッシャー・アックスモードで斬りつける!

「無理無理い!」

だがサゴーズコンボの巨大な腕パーツ、ゴリバコーンであっさり防がれてしまった。

だがそれでいいんだ。

なぜなら…

「エイジ！」

『サイ！トラ！コンドル！』

「せやッ！」

「あ！重力操作解けてやんの！」

エイジ（怒りモード）がいるからな！

エイジはオーズ・サトラドルにコンボチェンジしてトラクロールで斬り、

「せいッ！せいやあああ！！！」

「うおう！」

鋭い爪を持ったコンドルレッグで切り裂き、尖った角を持ったサイヘッドで突き刺した！

俺もおまけでデングガッシャー・アックスモードで今度こそ一撃食らわせる！

「はあッ！」

「ぐおおっ！」

偽オーズ・サゴーズコンボは地面を転がり木にぶつかった。

これなら勝てる…！

だが、

「まだまだだよ…コンボはまだまだあるんだからねえ！！」

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜♪』

「なっ…！？」

偽オーズは赤い瞳を持つ鳥の王、タジャドルコンボにコンボチェン

ジした。

「今度はタジャドルか…！」

「でもまだダメージは残ってる！勝てるはず…」

「ダメダメえ〜♪このコンボは一味違うから…ねえッ！」

そう言うのと、背中の中、3対の羽、クジャクウィングを展開して空に飛び立った。

空か…なかなか高いな。

「エイジ…ウナギあるか？」

「あるけどあれは落とせないな…」

「何かコンボはできないのか？」

「生憎とあんまりメダルを持ってなくてねー…」

そうか…

じゃあ俺がやるしかないか…

そう決めた直後、空から、

「届かないのかぁ！？でも俺様は届くんだなぁ…！」

という声と共にクジャクアームの腕についている丸い形をした武器、タジャスピナーから放った火球が降ってきた！

「「うわあああ！？」」

エイジと共に間一髪でダイブ！

危ねえッ！

当たるかと思った…

「あの野郎…！」

『From Ride DEN-O Gun from!』
「食らえッ！」

今度は電王・ガンフォームに変身して、デングッシャー・ガンモードで頭上を飛んでいる偽オーズを撃ち落とそうとする。
だが、

「当たらないよお！」

すばしっこく飛び回って一発も当たらない。

「くっ！ライダーを変えるか…！」

さすがに無駄だと思い、撃つのを止めたその瞬間！

「この時を待ってたぜえ…！」

『スキヤニングチャージ！』

「ひやはははああッ…！！！」

偽オーズ・タジャドルコンボは3つの赤い輪を突き抜けながら、コンドルレッグをクロー状に変形させて炎を纏っての両足蹴り、プロミネンスドロップを放ってきた！

「くそッ！エイジ逃げろッ…！」

「お前も逃げるんだよ士！」

「当たり前だろ！こんなところで死ぬなんてまっぴらだ！」

そう言って俺たちは走り始めた。
だがもう偽オーズ・タジャドルコンボはすぐそこまで迫ってきてい

た！

「死ねええええええええええ！！！」

遂にプロミネンスドロップが地上に到達した。

だが、少し走っていたおかげで、直撃は免れた。

「ぐああッ！！」

「うわあっ！」

それでも余波だけで変身が解除される程の威力だった。

くそ……力が入らねえ……

「お？まだ生きてたんだあ！」

まずいな……

このままだとおだぶつだぞ……

その時、何か飛んできて偽オーズに着弾した！

「何だこれ!?ぐわっ!」

「おいッ！！大丈夫かお前ら！」

それと同時に俺たちに駆け寄ってきたライダーが2人いた。

1人は仮面ライダークウガ。

ユウスケだろう。

だがもう1人は知らないライダーだった。

緑と黒のボディに丸いカプセルのような装飾があるライダーだ。

「こいつは誰だ？」

「その話は後で！今は逃げるぞ！」

クウガはそう言って俺を担ぎ、カプセルのライダーはエイジを担いで走った…

「逃げられたかあ…まあいつでも倒せるし大丈夫かなあ」

く光写真館く

俺たちは光写真館で治療を受け、変身を解いたヤツを見て驚いていた。

「あのライダーはアंकだったのか…」

「ああ。仮面ライダーバース。それがあれの名前だ」

斑鳩がいったヤツか。

それにしても…

「強いな…あの偽オーズ…」

「当たり前だろ。あいつは俺とガメル…銀色のコンボを使ったんだろ？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「ガメルはほとんどメダルを取られて無いんだ。その状態であいつがサゴーズを使ったのなら、人工のメダル…ギジメダルとでも言うておくか。それは…」

「もうほとんどのメダルが作られている…ということか」

それはまずいな…

全種類コンボ使い放題は卑怯だろ。

「だが普通はコンボにも弱点がある」

「「弱点!?!」」

俺もユウスケもアंकの話に食いついた。

当たり前だ。

あんなチートに弱点なんか思い付かないからな。

だがアंकの話はいいものではなかった。

「コンボってのは普通は負荷が大きすぎて連発や長時間使用ができないんだ」

「ん? アंक、あいつは連発してたぞ? サゴーズからタジャドルに」
「だから言っただろ。普通はってな。どんな効果があるかは分かんが、ギジメダルはコアメダルよりも負荷が少ないらしい」

あの強さで燃費もいいのか…

俺らしくないが、勝てる気がしない。

「化け物だな…」

「だが負荷が少ない分コアメダルよりも出力は落ちてるはずなんだ」
「あれで出力が落ちてる!?!」

信じられん…

「…とりあえずお前らもう休め。もう遅いしな」

「アंकは?」

「ライドベンダー隊で森の戦闘の証拠隠滅だな」

あいつも大変だな…

「まあ疲れはなるべく取るべきだな」

「確かな」

そろそろ寝るか。

「じゃあおやすみ」

「ああ…」

そうして俺は夢の世界へ落ちていった…

第六章（後書き）

こんにちはー！

ついにあいさつネタが尽きた剣崎シンジです。

2日に一回投稿、ギリギリアウトです。

ごめんなさい…

今回の話はタジャドル強し！

以上！

ごめんなさいもはやバスさんていうかアंकさん霞んできます。

バスorアंकを好きな方には謝ります。

すいませんでした。

ついでにサゴーズも霞んでる気がs（ry

次回は士の夢の話にgo！

士は夢の世界を破壊するのか！？

第七章（前書き）

士「ひどい目に遭った…」

ユウスケ「そんな夢だけで大袈裟な…」

士「お前もあんな目に遭ってみろ…死にたくなるぞ」

夏海「Σどんだけ怖い夢ですか！」

士「本日のゲストはこちらー…」

タクミ「こんにちは…って士さん！？」

ユウスケ「今日のゲストは尾上タクミ君です！」

タクミ「何で士さん死にかけてるんですか！？」

夏海「悪夢を見たらしいですよ」

タクミ「悪夢…？士さんをあんなにするなんて…どんな夢ですか？」

士「思い出すのも嫌だ…」

ユウスケ「ていうか士。タクミ君って貴重な普通の人だよな？」

士「周りとは比べればな」

ユウスケ「アスム君、タクミ君と来たらもうほとんどワタルくらい
しかないような…」

士「…今日でこの作品終わらせるか」

夏海「Σ夢で終わらせますか！？」

タクミ「あらすじいきまーす！」

ユウスケ「ごめんタクミ君、愛想尽かさないで！」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事…！！」「」」

士「1つ！オーズ（偽）と遭遇！気味が悪い口調だったぜ…」

ユウスケ「2つ！オーズ（偽）と戦闘！タジャドルマジチート！」

タクミ「3つ！バースの力を借りて撤退！…士さん負けましたね」

士「これ以上俺をいじめるなああ！！！！」

第七章

夢と管理者とクイズ大会

「ここは…？」

俺はいつの間にか真っ白い空間に来ていた。

俺は確か…写真館で寝て…その後は？

記憶がないな…

「まさか…ここは夢の中か？」

ってどこのメルヘン野郎だよ！

自分で言っただけ虚しくなった…

だがそこで以外な返事があった。

「そうだ…正確にはあなたの夢を借りて俺達がお前にコンタクトを取っている」

声がした方を見ると、そこには見覚えがある者がいた。

確か…

「剣崎一真…だったか？」

「ああ。他の奴にもいるぞ」

そう言われて辺りを見回すと、城戸と呼ばれていた青年や、旅が始まる前にカードを俺に渡したヤツなどがいた。

「…で、何のようだ」

「僕はあなたを試しに来たんですよ」

「試す？」

「…俺達は心配になったんだ。お前が酷い負け方をしたからな」

そう言ったのは豆腐を持って天を指差している男だった…豆腐？

「おい…何でお前は豆腐を持っている？」

「お前じゃない。…俺は天の道を行き総てを司る男…天道総司だ」

「多分、急な召集だったからじゃないかな。あ、おれは津上翔一。よろしく♪」

今度は笑顔で手を振りながら茶髪の男が自己紹介してきた。

「…乾巧だ」

「あの…もうちょっと愛想よくした方が…あ、ボクは野上良太郎です」

「僕とは会ったことがありますね。紅渡です」

「よう青年！俺はヒビキだ」

「俺は城戸真司。よろしく」

「…で、五代はまた来てない…か」

「どうせ旅してるんでしょ」

各々自己紹介が終わったので（俺のことは何故か全員に認知されている）、本題に入る。

「…それで俺の何を試すんだ？」

「知識ですよ」

「知識？強さじゃなくてか？」

「そうだ。お前に足りないのは状況判断に必要な知識だと多数決で決まった。：俺は強さだって言ったけどな」

「よって、クイズ大会をする事に決定しました♪」

：は？

「クイズ大会 いい！？」

「：やっぱりお前もふざけてると思うよな！？」

「うるさいですよ乾さん。：もう決まっちゃったんです」

「まさか：これも多数決か？」

「はい♪」

こいつらは何を考えているんだ：

ちなみに多数決は

クイズ大会に賛成か反対か。

賛成：津上翔一、城戸真司、ヒビキ、天道総司、野上良太郎

反対：乾巧、剣崎一真、紅渡

らしい。

「勝負で事前に情報が無いのとあるのは大違いだからな」

「だからって何故クイズ大会！？」

「：面白そうだから、ってモモタロスが勝手に：」

「もう始めますよ。準備してください準備」

「ちなみに出題者は俺、剣崎一真だ」

「ルールは妨害なし、早押し。正解したら抜けられます♪」

「最下位には罰ゲームだ」

マジでやるのかこれ？

マジなのか！？

「第一問！」

「始まったーッ！」

「オーズのコンボを全て挙げよ」

「はいッ！」

城戸が高速で手を挙げた。
早ッ！

「いいぞ。城戸答えろ」

「ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、タジャドル、
プトティラ、ブラカワニ、タマシー！どうだ！」

「残念。不正解だ」

「何だとッ！」

剣崎一真が超嬉しそうな笑みを浮かべてる。
：お前ら仲が良いのか悪いのかわからん…
だがこの問題、俺がもらった！

「はいッ！」

「答えろ門矢」

「ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、タジャドル、
プトティラ、ブラカワニ、タマシー、ラブコンボ！」

フッ！完璧だな！

「不正解だ。というかラブコンボは要らん」
「何ッ！」

この俺が不正解だと！

バカなッ！

「はい！」

「よし津上」

「ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、タジャドル、
プトティラ、ブラカワニ、タマシー、あとタトバ」

「正解！」

あ。

タトバ忘れてた。

「タトバがいたか」

「タトバだけわかんなかった…」

「右に同じー」

「てめえらタトバに謝れ！」↑でも忘れてた乾巧

タトバ…影薄いなあ…

「第二問、龍騎ライダーは全部で何人？」

「今度こそッ！」↑城戸

「分かった」↑天道

「……よし天道だ」

「何でッ!？」

「一度答えたからだ」

全くわからん…

ていうかこいつら早すぎる…

「13人」

「正解だ」

「フッ」

ヤバい罰ゲームだけはイヤだ！

「第三問！」

今度は取る！！

「クウガのフォームを全て挙げよ」

「はい…」

「よし野上」

だから早えええ！！
俺も分かったのに！

「えーと、マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメット！」

「…お前よくそれで手を挙げたな。不正解だ」

「およく…」

これは…いけるか！？

「はいッ！」

「門矢、今度こそ正解しろよ」

「ああ！マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメット、グローイング、ライジングマイティ、ライジングドラゴン、ライジングペガサス、ライジングタイタン、ライジングアルティメット！」

ふう、やっと終われるぜ。

だが、

「…不正解だ」

「嘘だッ!!!」

「そんなネタ使ってもダメだ。かなり惜しいぞ」

くそおおおおお!!!

「はい!」

「はいヒビキ」

「マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメット、グローイング、ライジングマイティ、ライジングドラゴン、ライジングペガサス、ライジングタイタン、ライジングアルティメット、アメイジングマイティ」

「正解だ」

「よしきた!」

「バカなあああ!!!」

「アメイジングがあったかあ」

アメイジングマイティ!? 何だそれ!?

「あと5人だな」

「死へのカウントダウンだね♪」

「津上! 不吉なことを言うな!」

罰ゲームの内容が気になって仕方ない…

「では第四問: ブレイドのジャックフォームの変身時の音声は?」

「たとえば『K a m e n R i d e D E C A D E!』みたいなね

♪」

「超そっくり!!」

ジャック…?

キングならわかるが…

「はい!」

「よし城戸」

「アブソーブクイーン、エボリューションキング」

「…正解だ」

「っしゅあ!!」

剣崎…本気で悔しそうだな。

城戸になんの恨みがあるんだ…

「第五問」

「罰ゲームが楽しみだなあ」

「後でボコすぞ城戸」

「Σ何でッ!?!」

漫才やってないで問題出せよ…

「キバの最強フォームは?」

「はい…」

「野上、もうボケるなよ」

「ぼ、ボケてないですよ! えーと、インペラーフォーム!」

「…もうボケるなと言ったよなあ」

「今のは僕も許せません…!」

剣崎と紅が変身してもいないのにキングラウザーと斬バットソードの切っ先を野上に向けている…

野上が罰ゲーム前に死ぬ！
罰ゲームがそんなに酷いものかは知らんが。

「次の問題に行けえッ！！」

「：冗談ですよ巧。本気でやるわけ無いじゃないですか」

紅の目が笑ってない：
もう嫌この面子。

「というかお前ら、まだこの問題は続いてるぞ？」

「「「あ」」」

「はいッ！！」

「てめっ、紅！」

「早押しですから！エンペラーフォーム！」

「正解だ」

ヤバイヤバイヤバイ！！

あと3人だ！

「第六問にいくぞ」

「そろそろ正解しないとヤバいんじゃないか？」

「カブトのライダーキックに使われるエネルギーは？」

「キタアーツ！！！！」

「うわっ！？」

乾がいきなり叫んで手を挙げた。
大声出すなよ！！

「乾、答えろ」

「タキオン粒子！」

「よくやった。正解」

「よしッ！」

うわあああああ！！！！

もうあと2人だあああ！！！！

「第七問、アギトの最終フォームは」

よしキタアアア！！！！

「シャイニングフォーム！」

「ですが、」

「なんだとおおおお！！！！？」

ズルいだろそれ！？

「よく見ろ。『くを挙げよ』のような形でもないのに文末にクエス
ションマークがない」

「くそおお！！！」

「じゃあ続きだ。アギトの最終フォームはバーニングフォームから
フォームチェンジする場合、何をする？」

簡単じゃねえか！！

「あ、それなら…」

「野上、正解しろよ」

「日光浴…だったっけ？」

「正解！」

「やった！」

結局俺が最下位だ！
…嫌な予感がするぞ。

「では罰ゲームを発表する。…ロイヤルストレートフラッシュだ」

「絶対この前当てられなかった腹いせだろそれ!？」

「さあな?行くぞ:!!」

『Turn Up』

『Royal straight flash』

直接キングフォームになったぞ!？

こっちは生身!死ぬ!マジで死ぬ!!

「死ねえええ!!」

「やめろおおおお!!!!!!」

時計を見ると6時半：
そろそろ朝飯だな。

「いや、何でもない」

その時キッチンからの方から、

「土くーん！エイジさーん！ご飯ですよーッ！」

となつみかんの声がした。
じゃあ行くか。

「エイジ！朝飯だぞ！」

「ああ…ごちそうになって悪いな…」

そうして俺の長い悪夢は終わった……

第七章（後書き）

ハロハロー！

剣崎シンジです！

今回は初のオールギャグ！

テンションの維持が難しいです…

天道が好きなのにほとんど話してない！

ボクが書いたのに何故だ…orz

次回は事件の真相に迫ります！

探偵らしく！

第八章（前書き）

士「オレ達がチームだ！！！！」

シンジ「ボクの真似をするな！」

ユウスケ「今日のゲストは辰巳シンジさんです！」

シンジ「今日はホントは取材だったのに…」

夏海「本当にすいません！」

シンジ「すぐ終わらせてよ？」

ユウスケ「じゃあもうあらすじいきます！」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事！！！」」

士「1つ！俺の夢に剣崎一真御一行が乱入！」

ユウスケ「2つ！なぜかクイズ大会が勃発！ホントになんで？」

シンジ「3つ！結局罰ゲームは士でした！よし取材取材！」

夏海「…せめてもうちょっと真面目にやって欲しかったです…」

第八章

エリと水棲系と初コンボ

「いやー栄次郎さん料理上手ですねー♪」

俺たちは写真館で朝食を食べていた…のだが…

「そんなことはないよ、君も十分うまいじゃないか」
「いやいや、栄次郎さんには及びませんよー！なんかこう、思いが伝わってきます！」

…エイジとじいさんが意気投合してるし！

ちなみにじいさんとはなつみかんの祖父、光栄次郎のことだ。

毎日俺たちの食べる料理を作ってくれている。

そのじいさんがエイジに料理を教えているのだ。

エイジも昔料理人をやっていたらしく、料理が上手いのだが、そのエイジが教えてもらうほどじいさんはスゴいらしい。

「…じいさんもう写真館辞めて料理人になれよ」

「私は反対です！この写真館を続けな…」

「でもレストランとか始めたらすぐに士の踏み倒した分を取り返せ
ると思うけどなあ…」

「後でおじいちゃんに頼んでみます」

変わり身早ッ！！

だが頼んでも無駄だろうな…

楽しいから作ってるだけだし。
その時エイジが、

「あ、おい土ー！土ってばー！」

「聞こえてる！で、何だ？」

「そいえば会ってもらいたい人がいるんだ」
「会ってもらいたい？」

何でこのタイミングなんだ。
しかもずいぶん急だな…

「誰だ？」

「うん。斑鳩ファウンデーション会長秘書の…」

うん？

なんか聞いたことのある肩書きだな…

「外街エリっていう人」

外街エリ…

そうだ！

思い出したぞ…

「あの辛党か…」

「ああ！あの人ですか！」

「あの激辛麻婆豆腐はもう色からアウトだった…」

「あ、知ってたんだ！じゃあ話が早いや♪」

「…また斑鳩ファウンデーションに行くのか」

はっきり言って、もうあそこには行きたくない。

いい思い出が1つもないからな。

「ううん違うよ」

「え？じゃあどこに行くんですか？」

「えーと確か…エリのバイト先の…レストランNEKOJITAだ
！」

（レストランNEKOJITA）

「こんにちは皆さん」

俺たちはエイジに連れられて裏路地にあるレストランに来ていた。
そこで外街に会っていたのだが…

「またお前はゲテモノ料理食ってるのか…」

「ゲテモノではありません。TKG（唐辛子かけご飯）です」

「…すまん訂正だ。料理ですらない」

しかも粉末をかけているのではなく、そのまま（あの細長いの）を
のせて食べているのだ。

…拷問か？

「えーと…話していい？」

エイジが確認するが、誰も返事をしない。

俺と外街の間に流れている変な空気に押されているみたいだな。
俺は気にしていないが。

「…沈黙は肯定と受け止めます。この外街エリは、なんと水棲系のグリード、メズールなんです♪」

⋮
は？

「ええええええええええ!!!」

「うわっ！うるさっ！？」

「…店内では静かにしてください」

「え、だって……ええ!？」

かなり驚いた：

まさか外街がグリードだとは……

「だが何故お前はグリードなのにエイジ・オーズの味方をするんだ？」

「アंकと同じ理由です：利害が一致してるから」

「その利害って何なんですか？」

「当然コアメダルです」

「何故コアメダルが欲しいのに斑鳩のどこにいるんだ？」

「∴理由は色々ありますが、一番は斑鳩ファウンデーションに保管されているコアメダルの奪還です」

斑鳩ファウンデーション！？

つてことは、

「お前はスパイみたいなモノなのか？」

「まあそうですね。エイジ達に斑鳩から得た情報を渡してますし」

「…カッコいいなあ…」

「おいユウスケ。何で羨ましそうに外街を見ているんだ」

ガキかこいつ…
ていうか、

「そもそもコアメダル狙いでエイジにつく理由が分からん。それなら斑鳩にいた方が楽じゃないか？」

「うーん…確かに」

エイジも俺の意見に同調する。

「う…それは…」

何だ？顔を赤くして口ごもったぞ？
まさか…

「お前エイジが好…」

「笑いのツボ！！」

グギッ！！なんて効果音をあげてなつみかんの指が俺の首に突き刺さった。
途端に、

「くっ…はっはっはっはッ！！！」

笑いが止まらなくなった…
なつみかん…この野郎…！

「何しやがる…ははっ！…なつみかん！」

くそッ！まだ余波が…！

「人の恋路を邪魔するからです」
「そうだぞこの空気の破壊者！」

何だこの言われよう…

しかも当のエイジは頭の上にハテナ浮かべてるし…

「ゴホン！それでは外に出ましょう。うるさすぎて迷惑になってます。それに…」

外街は急に真剣な顔になり、

「グリードが近くまで来てます」

くどある裏路地く

レストランNEKOJITAの前では、3人の人…いや3体の異形が話していた。

「ここからメズールの気配がするう！」

「ここか…」

「ここにメズールが…状況によっては…」

あれがグリードか…

え？俺たちがどこにいたかって？

それは、

「まさかボク達が外街さんをおとりにして敵の隙をうかがっているなんて、あいつら思わないだろうなあ」

…全部エイジが説明してくれた。

ちなみに場所はレストランの近くにある樽の中。

ちょうど小さな穴が空いていて、外が見えるのだ。

そろそろ予定通りなら…

その時レストランの近くにバイクが止まった。

お！来たな！

バイクから降りてヘルメットを取ったのは、アंकだった。

「おい、お前ら！ここで何している！」

「あ、アंकだぁ…」

「貴様！何をしに来た！」

「ていうかガメル興味無さげだね…」

先ほど連絡を取って作戦に協力してもらった。

作戦とはこうだ。

まずは店内にわざと外街を置いてきて、普段隠しているグリードの
気配を少し出させる。

すると、グリード達が来るので、そのタイミングでアंकに飛び出
してもらう。

これがここまでの予定。

そして、

「カザリにウヴァにガメルか…ここで一網打尽にしてやる！変身！

！」

『カポーン』

「変身した！？」

「何だこいつは？」

アंकがヤツらの気を引き付けてる間に、

「今だ！」

「ああ、しくじるなよ！」

「当たり前だろ」

「「変身!!」」」

『Kamen Ride DECADE!』

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

一気に畳み掛ける!!

まず俺は一番速そうなカザリに狙いをつけ、

『Final Attack Ride D—D—D—DECADE
E!』

「はあああ!!」

「ディケイド!?!うわあああ!!」

カード状のホログラムを突き抜けながら、ライドブッカー・ソード
モードで斬りつける!

カザリは直撃し、メダルをばらまきながら吹っ飛んだ。

「カザリ!!」

「お前の相手はオレだ!」

「ぐっ!」

緑色の昆虫のような姿をしたグリード、ウヴァはカザリの助けに回
ろうとしたが、そこはユウスケが上手くやってくれた。

さて、エイジの方は:

「行くぞエイジ!」

『ドリルアーム』

「ああ！」

『サイ！ウナギ！バツタ！』

「メズールう…お前らジャマだあ！」

灰色の巨大なグリード、ガメルと戦闘していた。

かなり苦戦はしているみたいだな。

加勢するか。

そう思いエイジ達の方に近づこうとした時、

「…ディケイドオオオ！！！」

『Kick』

「何ッ！？ぐわっ！」

不意打ちを食らって地面を転がってしまった。

くそ、まだ倒せてなかったか…！

すると、足下にセルメダルとは違う黄色いメダルがあることに気付いた。

「これは…」

チーターのコアメダルだった。

俺はライオンも持っている。

エイジはトラを。

この3つがあれば…

俺はライオンとチーターのコアメダルを、

「エイジ！受けとれッ！」

「は？うわっ！？」

エイジに向かって投げつけた！

ナイスキャッチ！

「これは…」

「使え！コンボができるだろ！」

「…アंक、ちょっと離れてろ」

エイジはドライバーからメダルを全て外し、黄色いメダル3枚を代わりに入れた。

さあ…！エイジの初コンボだ…！

「…いくぞ！」

『ライオン！トラ！チーター！ラタラター♪ラトラーター♪』

…エイジは黄色い装甲、青い瞳を持つ獣の王、ラトラーターコンボに変身した。

そして、

「…うおおおおお！！！！」

急に叫んだかと思うと次の瞬間、

「うっ！」

ガメルの巨体が吹っ飛んでいた。

速い！

クロックアップ程では無いが、目でギリギリ追えるような速度だったぞ！

そしてエイジは高速でガメルとの距離を詰め、

『スキヤニングチャージ！』

「せいやあああああ!!!」
「うわあああ!」

目の前に発生させた黄色の円を通り抜けトラクローでX字にガメルを切り裂いた!

ガメルはメダルを吹き出して膝をつく。

だが、まだやられてはいない。

「グリードはどいつもこいつもしぶといな…」

「くっ…しょうがない!使うぞカザリ!」

そう言ってウヴァが取り出したのは、またカードだった。
だがカザリの使うラウズカードとは違う。

「今度はアドベントカードか…!」

「カザリの報告通りだな。これも知っていたか」

そう、ウヴァが持っているのは龍騎の世界のライダーが使うカード、アドベントカードだった。

そしてそれを腕につけた箱の様なものに差し込むと、

「今回は逃げさせてもらう」

『N a s t y v e n t 』

耳を塞ぎたくなるような不快音が辺りに響き渡った!
耳が…!

「ぐううう…!」

「なにこの音…」

「頭いたい…」

「俺達は帰るぞ」

「ガメルも連れてかなくちや」
「そうだな」

ま…待て…!

だがあまりの音に俺たちは何もできなかった…

第八章（後書き）

シュッ！↑ヒビキさんのヤツです
剣崎シンジでーす♪

八章です！

八章にしてやっとエイジがコンボを…！
今までよく亜種コンボで頑張った…！

ありがとう亜種！

そしてこれからもよろしくね亜種！

今回はグリードの根城にこっちから突撃！？
…するかもです。

第九章（前書き）

士「…なあ」

ユウスケ「どうした士？」

士「まだ俺が使ってないカメラライドってなんだ？」

ユウスケ「えーと…クウガ、アギト、龍騎、ブレイド、かな？」

士「なんかな…今回も出てこないヤツさ…もう出なそうなんだよな…」

ユウスケ「おいてめえ、クウガに泣いて謝れ」

夏海「…もはや前書きですらハブられる私って…orz」

士「今回のゲストはこいつだ」

ワタル「こんにちはー」

ユウスケ「ワタルくん！」

ワタル「ユウスケさん！また会えましたー！」

夏海「私たちに残された最後の希望、ワタルくんです！」

ワタル「Σ最後の希望って何ですか!？」

士「もうお前しかまともなヤツが残ってないんだよ…」

エイジ「ちなみに残りの面子はソウジさんとモモタロスさんらしいよ！ボク知らないけど！」

士「お前は出てくるな」

エイジ「いつもそうだけどひでえ！」

ユウスケ「…そろそろあらすじにいかうか、ワタルくん」

ワタル「はい…」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事!!!」」

士「1つ！エイジとじいさんが意気投合！エイジが料理うまいなんて…」

ユウスケ「2つ！外街さんがグリードだった！ビックリしたよホント」

ワタル「3つ！グリードとの戦闘！…ガメルってグリード馬鹿っぽそうでしたね」

第九章

プリンと想いと全面戦争

「まだ頭いたいー…」

「ラトラーターは五感も強化されるからな…」

「おいしーです!」

「エイジは食べないの?」

「…頭いだい」

グリード達との一戦から30分経った頃。

俺達はデザート専門店『モモプリン』でプリンを食べていた。

…約一名を除き。

そんなに痛いなら病院行け!

「…本当に大丈夫ですか?」

エイジの横では外街が心配そうにしている。

そうそう外街といえよ。

多少疑問があったんだ。

「…なあアंक」

「なんだ?」

「グリードでも恋ってするんだな」

そう言うと、アंकは複雑そうな顔をした。
どうしたんだ?

「その事なんだがな…よくわからん」

「分からない？」

「推測ならできるが…多分あれはメズールの『願い』に大きく起因している」

「願い？」

「…あいつは人間の『愛情』に憧れていた。だからガメルには優しかったな」

それが何なんだ？

じゃあもう愛情を手に入れていたんじゃないか？

「だが所詮はグリード。ガメルに対する愛情はままごとなんだよ」

「でも今はエイジに本気で惚れているように見えるが」

「…それがわからない。そんなことはあるはずがないんだ」

「…グリードだからか？」

「そうだ。絶対に満たされない。…それがグリードだ」

そうか…

グリードも色々あるんだな…

そう思っていると、

「なあみんな」

お、やっとエイジが回復したぞ。

でもなんか凄い笑顔なんだが…

「どうしたんだ？」

「もうこっちからグリード潰さない？」

こいつ怖い！

ニコニコ笑顔でこの台詞は恐い！
ただ、その意見はいいと思うが：

「ヤツらがどこにいるか分かるのか？」

「それは俺が知っている」

そう言ってアंकが手を挙げる。

そうか：それなら、

「俺は賛成だ」

「俺も」

俺とアंकが同意した。

そして、

「私입니다」

「じゃあオレも賛成！」

外街とユウスケも手を挙げた。

あとは：

「お前はどうかんだ、なつみかん？」

「：私たちから攻めたらダメだと思います」

やっぱりか：

伊達に長く共に旅をしていない。

そう言うと思ったぜ。

「だがななつみかん、あいつらは今も人を襲っているかもしれないんだぞ？」

「…それでもです！」

おいおい…

これは説得しきれないぞ…

すると外街が、

「なら、懲らしめるだけにしましょうか」

な！？なに言ってんだこいつ！？

まあこれならなつみさんも賛同するが…
すると案の定、

「それならいいです」

と納得してしまった。

俺は小声で、

「…いいのか？あんなこと言って」

「はい。どうせ嘘ですし」

「まあ…間違った判断とは言わないが…嫌われるぞ？」

「別に構いません。…馴れてます」

そうか…

そこまでの覚悟があって言ったならなにも言わん。

だから俺はアंकに、

「それでグリードの根城はどこだ？」

「…街の外れの廃墟だ。バイクで5分くらいだな」

廃墟か…

それなら思い切り暴れられるな。

「それじゃもう行こうか♪」

「待てエイジ」

アंकがエイジを呼び止める。

そして右手をエイジに向け、何かを飛ばした。

「これは…」

「クジャクだ。いざとなったら使え」

「一枚で問題ない。セルメダルちゃんと取ってこいよ！」

「…ああ！」

「それなら私からも」

外街は立ち上がり、エイジにメダルを2枚手渡した。

「シャチとタコ…」

「これでコンボができるでしょう？ まあアंकよりもマシですし、
持っていてください」

「…ありがとうございます」

よし、準備はできたな。

じゃあ…

「行くか」

「ああ」

「おう！」

くとある廃墟

ここは街外れの廃墟…

今は異形のモノたちが住み処にしているのだが…

「おいカザリ…」

「なにウヴァ？」

「ガメルのメダルが減っている」

「なに？ガメル本当？」

「うー…ゾウが一枚ない…」

「くそ…オーズだな…！」

そう言って化け物たちは怒りに震える…
その時、

「グリードさんいますかぁー♪」

「ッ!？」

化け物たちは一斉に入り口の方を見る。
そこにいたのは…

「オーズ…!!」

仮面ライダーオーズだった。

俺たちの派手な登場にグリードたちは困惑しているようだった。

それはそうだろう。

今まで攻めてこなかったヤツが急に來たら誰だって驚く。
何はともあれ…

「さあ：ヤツらを倒すぞ!!」

「「変身!!」」

『Kamen Ride DECADE!』

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

俺たちはグリードに突っ込んでいく!
だが、グリードもすぐに対応してきた。

「くそッ!?ウヴァ!」

「分かっている!」

『Advent』

その音声と共に出てきたのは…

巨大な蜘蛛だった!

だがな、虫は火に弱いのがお約束なんだよ!

「あいつは俺がやる!」

『Kamen Ride AGITO!』

『Form Ride AGITO Flame!』

『Attack Ride Flame saber!』

俺は黄金の龍の戦士、仮面ライダーアギトに変身し、炎を使う赤の戦士、アギト・フレイムフォームに姿を変えた。

そして呼び出した炎の剣、フレイムセイバーで蜘蛛を斬りつける!!

「はぁッ!」

だが思ったよりも硬く、刃が通らない！
そして弾かれたところを脚で吹き飛ばされた！

「ぐあああつ！！」

「士ッ！」

心配したエイジが声をかけてくる。

だがエイジもユウスケも苦戦している。

エイジは1人でウヴァとカザリと、ユウスケはガメルと戦っている。
そこで俺は手に持ったフレイムセイバーを、

「ユウスケ！受けとれ！」

「うわっ！？」

ユウスケに向かって投げつけた！

ユウスケは驚きながらもそれをキャッチし、

「士サンキュッ！超変身！」

紫のクウガ、重厚な鎧を纏ったタイタンフォームにフォームチェンジした。

タイタンは速度が失われる代わりに防御、パワーが大幅にアップする。

これでユウスケは大丈夫だろうな。
多分。

じゃあ俺は…

「このでかい蜘蛛を焼き尽くすか！！」

『K a m e n R i d e R Y O K I !』

『Final Attack Ride R—R—R—YOKI
!』

俺の周りにとぐろを巻くように赤い龍、ドラグレッダーが飛ぶ。
俺はその中心を跳び、そして…

「はあああッ!!」

ドラグレッダーの吐いた炎を纏いながらキックを決める！
そしてその蹴りは蜘蛛を貫通、爆散させた！
よしッ！

「エイジッ！加勢するぞ！」

「士ッ！頼む！」

俺はライドブッカーをソードモードにしてウヴァに斬りかかった！
だがウヴァはそれを上手かわし、

『Sword vent』

「食らえ！」

「アブなッ！」

剣を呼び出し反撃してきた！
それを俺はギリギリでかわす。
かすったぞ今…！

「士！どいて！一気に決める！」

そう言ってエイジは赤いメダルを2枚取りだし、ドライバーに装填した。

「…エリ！使うよ！」

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜♪』

エイジはシャチを思わせる頭に鞭持った腕、タコの足のようなモノがついている足を持つ青のコンボ、オーズ・シャウタコンボにコンボチェンジした！

そして、

「はあッ！」

「ぐおおお！！！」

「うわあッ！」

頭から高圧水流を発射し、ウヴァとカザリを吹き飛ばした！

「くそ…完全態なら…！」

「ウヴァ…僕のメダルを全てもらって」

「なにッ！？何を言っている！」

「そうすれば完全態まではいかなくても、対抗できるだけの力が手に入るはずだ」

なんだ…？

小声で相談し始めたぞ？

「おい！バカなことは…」

「じゃあウヴァ、あとは頼むよ」

なっ！？

カザリがメダルに変わった！？

俺たちが驚いていると、ウヴァはそのカザリだったコアメダルとセ

ルメダルを全て吸収した。

「…ウオオオオオオオオオオ！！！！」

「ッ！？」

「なんだ…？さっきとプレッシャーがまるで違う…！」

そしてウヴァは立ち上がり、俺たちに言った。

「俺は貴様らを許さない…。カザリの為に、貴様らを殺す…！」

俺たちの前に、ウヴァ・完全態が降臨した…：

第九章（後書き）

おっす！オラごk（ry

剣崎シンジです。

あいさつネタがアアア！！

（ちなみに作者はあまりドラゴン●ールを知りません。悪しからず）

投稿遅れて本当にすいませんでした。

かなり反省しています（主に書くスピード）

そしてカザリ退場！

怒るウヴァ！

もはや影のガメル（とユウスケ）！

…なにげにアंकも残り一枚だし…

次回はウヴァ・完全態の力に手も足もでない士たち！

だがウヴァに異変が…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6186x/>

仮面ライダーディケイド～仮面ライダーオーズの世界～

2011年10月29日13時04分発行